

ジュニャーナシュリーミトラ「瞬間的消滅論」

——思想的クロノロジーの逆転——

谷 貞 志

1 思想的クロノロジーの定説

従来の定説¹⁾によれば、ラトナーカラシャーンティの『内遍充論』は、ジュニャーナシュリーミトラの『瞬間的消滅論』に準拠したラトナキールティの『瞬間的消滅論』を批判する目的で書かれたことになっている。本稿は、これに対して、思想的クロノロジーが逆の関係にあることを論証する。すなわち、ジュニャーナシュリーミトラの『瞬間的消滅論』はラトナーカラシャーンティの『内遍充論』を批判する目的で書かれたということを明らかにしたい。定説の根拠は、後期仏教論理学が「外遍充論 (bahirvyāpti-vāda)」から「内遍充論 (antarvyāpti-vāda)」へ論理的に発展したとみなされていることにある。つまり、遍充（論理的必然性 vyāpti）を論証主題以外の喩例に基づいて帰納的に決定する外遍充論から、喩例をもちいることなく論証主題そのものにおいて演繹的に決定できる内遍充論へ最終的に転換されたという観点から帰結されているのである。現代の演繹論理学の視点からは、明らかに後者の「内遍充論」が、より発展したものであるとみなされることにも起因して、ラトナーカラシャーンティの「内遍充論」は喩例を提示するジュニャーナシュリーミトラとラトナキールティの「外遍充論」を批判するものとして後期仏教論理学の最終の論理的発展段階に位置づけられてきた。

2 ラトナーカラシャーンティ『内遍充論』における論証

ラトナーカラシャーンティの「内遍充論」の核心は後期ダルマキールティの「反所証拒斥認識根拠 (sādhya viparyaye bādhakapramāṇa)」を最強の論証方法とみなすことにある。梶山博士によって明らかにされたその論証のアウトラインは次のようなものである。まず、「存在=効果的作用」と規定する。効果的作用をなすことは継時的であるか同時的（非継時的）であるかのどちらかであって、それ

以外の可能性はない。したがって、その対偶をとれば次のような論式が構成される。「継時的にも同時的にも作用できないものは、効果的作用がない。〈必然性〉／非瞬間的なものは継時的にも同時的にも作用できない。〈主題所属性〉／〔非瞬間的なものは効果的作用をなすことができない。〈結論〉〕」ここで、第二支は、次のようにプラサンガによって証明される。「非瞬間的なものは時間的様相が排除されているので、過去・現在・未来にわたって自己同一性を保っている。そのような存在は継時的に作用したりしなかったりすることができない。本質的に同一性が仮定されているからである。また、同時に結果を発生することを完了できない。「現に作用している状態」と、「作用を完了してもはや作用しない状態」が同一の存在に起こるはずがないからである。したがって、非瞬間的なものは、効果的作用能力をもたないから、存在できないことが帰結される。」この論証は喩例に基づいて証明されるのではない。そうではなく、「能遍の否定的認識」によって演繹的に証明されている。しかし、この論証がプラサンガを含んでいる複合論証であることからみれば、思想史的には、すでにダルモッタラとプラジュニャーカラグプタとの間にプラサンガに関する論争があり、そのうち、これはダルモッタラの「プラサンガとその還元式」によって「否定的必然性」を決定するものと同型の論証式である。〔谷(1983c) 10, 岩田(1993) 108-109等参照〕したがって、ラトナーカラチャーティはダルモッタラに準拠しているのである。

3 ジュニャーナシュリーミトラの論証式

これに対して、ジュニャーナシュリーミトラの論証は、ダルモッタラを批判するプラジュニャーカラグプタの「プラサンガとその還元式」に準拠しているのである。〔谷(1983c) 8-9, 岩田(1993) 109-112〕「すべて存在するものは瞬間的存在である。たとえば雨雲のように」ということを証明するために、ジュニャーナシュリーミトラは知覚可能な喩例を主題とみなして、その「雨雲」に対してプラサンガを適用する。その還元式の主題(ダルミン)も、反所証拒斥論証のように虚構された「非瞬間的なもの」ではなく、リアルな「雨雲」であり、主題所属性を充す。こうして、還元式は「肯定的必然性」を決定する正規の独立論証に以下のように還元される。

およそ、あるとき、あるものxがあるものyを発生する〔効果的〕作用能力をもっていれば、xはそのときyを必ず発生させる。たとえば、原因が〔完全に〕

総合される最後の「瞬間的」状態がそれ自身の結果を発生させるように。〈必然性〉

その雨雲は、それ自身の「雲」の内部に水を保ちつつある状態のまま、農夫の眼に喜びをもたらすことなどの結果をなしてしまう。あるいは、雨(水)を現在降らせているときに、そのような作用をなす。また、このような「可能性としての」能力はそれら二つの状態において、二つとも結果をなすことができる〔と反論者は主張している。〈主題所属性〉〕[JNA 17, 10-10]

[そうだとすれば、この雨雲は現在においても、過去と未来の時点に属する結果を発生させることになってしまう。しかしこのことは事実と反する。〈結論〉]

上記のプラサンガの還元式は次のようなものである。

およそ、あるとき、あるものxがあるものyを発生させる作用をなさないならば、そのxはyに対して「効果的」作用能力をもたない。たとえば菱が稲の芽に対するように。〈必然性〉

[この雨雲]は第二瞬間以降において、第一瞬間に機能した作用をなさない。すなわち第一瞬間において、第二瞬間以降に機能した作用をなさない。〈主題所属性〉[JNA 17, 23-18. 1]

[この雨雲は、各々の作用に関して、有能力と無能力を本質とすることによって、各瞬間ごとに差異を発生させている。すなわちこの雨雲は瞬間的なものであることが証明されたことになる。〈結論〉]

4 定説の逆転

ラトナーカラチャーンティの論式がダルモッタラに準拠し、ジュニャーナシュリーミトラの論式がプラジュニャーカラグプタに基づいていることから、両者はほぼ同時代に対立し、併存していた可能性がある。しかも、定説に反して、ジュニャーナシュリーミトラの『瞬間的消滅論』はラトナーカラチャーンティの『内遍充論』を批判する目的で書かれたと考えられる。主要な論拠は二つある。第一にジュニャーナシュリーミトラの「肯定的必然性」の証明は、喩例による帰納的論証ではない。喩例「雨を降らし躍動する雨雲」は還元式を、主題所属性を充す正規論証にするために、主題(ダルミン)として導入されているのである。その意味で主題以外の喩例の存在を前提とする「不共不定の過失」は超えられていたの

である。したがって、それは、ラトナーカラチャーティが「不共不定因を過失とする者」として批判する旧来の外遍充者の論証式ではない。その批判対象は、むしろディグナーガの論理学を残存させて、瞬間的存在性論証が不共不定の過失をもっているとした者たちではないだろうか。また、ラトナーカラチャーティは、ジュニャーナシュリーミトラの「複合プラサンガ」に基づく論証式にまったく言及していない。もし、ラトナーカラチャーティがジュニャーナシュリーミトラやラトナキールティを批判したのだとすれば、当然、プラジュニャーナカラグプタ型のプラサンガとその還元式について言及すべきであったろう。第二に、ジュニャーナシュリーミトラが「反所証拒斥認識根拠論者 (sādhyaviparyaya-bādhakapramāṇavādin)」という名称で、「反所証拒斥認識根拠」によって「否定的必然性」を決定しようとする者を批判していることである。[単数形と複数形で二箇所。JNA 60, 17; 62, 19] この「反所証拒斥認識根拠論者」こそ、ラトナーカラチャーティ、あるいは、彼が所属する一派ではないだろうか。ラトナーカラチャーティの「内遍充論」は上述のように「反所証拒斥認識根拠」を基軸としているからである。しかも、ジュニャーナシュリーミトラは「反所証拒斥による論証」を知らなかったわけではない。彼によれば、反所証拒斥認識根拠は独立の認識根拠ではない。主題「非瞬間的なもの」は非実在であって主題所属性を充さないからである。「能遍の否定的認識」は知覚できないものの否定的認識の可能性を含むため、論証主題と喩例はフィクション(虚構: 亀の毛)であり [JNA 65, 8-11], 概念構想の領域内で対偶をとるための論理形式をもっているとしても、知覚によって主題所属性を確認できない。したがって、それは正規の論証ではなく、「否定的必然性」を独立に決定できないからである。否定的必然性は肯定的必然性が決定された後で、対偶によって書き換えられるが、逆は成立しない。すなわち、論理的には、肯定的必然性と否定的必然性とは同等だとしても、認識論的には、知覚可能な肯定的必然性が第一次的(直接的)なものなのだ、とジュニャーナシュリーミトラは批判する。[JNA 61, 2-4; 9-11; 18-24] 他方、すでにダルモッタラは「能遍の否定的認識は、たとえ論証主題が実在しないものであっても絶対的否定 (prasajyapattiśedha) によって有効である」と言っていた。ラトナーカラチャーティはこれに準拠して、実質的には「主題所属性」の条件を外したのである。また、喩例や主題としての知覚形象は拒斥されるという無形象唯識論の立場をとれば、「反所証拒斥」を独立の認識根拠とみなすことができる。これに対して、ジュニャーナシュリーミトラは『否定的認識の秘要』Anupala-

bdhiraḥasya においてプラジュニャーカラグプタに準拠し、否定を「両立不可能なもの認識」による「相対的否定 (paryudāsa)」に限定した。両立不可能な対立項の形象を知覚することによって当の対象を否定することは、立ち現れている知覚対象のみが真実であり、それらは拒斥できないとする有形象唯識論に裏打ちされている。この視点から、『瞬間的消滅論』の最終部分において、主題としての知覚形象の瞬間性は推論以前に直接把握されているとみなされ、「知覚による瞬間的存在性証明」が試みられた。以上のわれわれの結論はラトナーカラジャンティの『般若波羅密多要論』*Prajñāpāramitopadeśa* の無形象唯識論がジュニャーナシュリーミトラの『有形象成立論』*Sākārasiddhiśāstra* に引用され批判されていることを明らかにした梶山博士の成果に一致する。[Kajiyama (1965)] しかも、その批判理由は「能遍の否定的認識」が知覚可能領域を逸脱するということにあった。[沖 (1983)] このように後期インド仏教論理学はその最終段階においても、論理を認識論から分離していなかったのである。「内遍充論」が批判されたというこの思想的クロノロジーの逆転は、仏教論理学が「認識論を欠く演繹的形式化」の危機に気づいていたことを意味しないだろうか。

JNA: Jñānaśrimitranibandhāvali. ed. Anantalal Thakur. Patna 2nd ed. 1987. [1st ed. 1959]. Kajiyama (1965): Controversy between the Sākāra—and Nirākāra—vādins of the Yogācāra School, 『印仏研』 14-1, 418-429. 沖 (1983) 「インド後期唯識思想における正しい認識」『日本仏教学会年報』 48, 118-137. 谷 (1983c) 「ブラサンガ・サーダナ (帰謬論証) 導入による論理系の構造変換—ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタの解釈の差異—」『仏教学』 15, (1)-(27). 岩田 (1993) 「Prajñākaragupta による prasaṅgaviparyaya の解釈」『印仏研』 42-1, (106)-(112). [この論文は拙稿が明確にできなかったプラジュニャーカラグプタの二つの論式を分離・抽出することに成功している。]

1) 定説に関しては梶山雄一「後期インド仏教の論理学」『講座・仏教思想 第二巻』 pp. 243-320. [p. 288, 298]. 御牧克己「利那滅論証」『講座 大乘仏教 9』 pp. 219-254. [pp. 219-221] 等を参照されたい。[本稿は梶山博士の御指導をはじめとして御牧博士、岩田博士の貴重な御示唆を受けた論文『瞬間的存在性 (利那滅-KṢAṆABHAṅGA-) の研究』の一部分の内容を拡張したものである。スペースの関係で、特にジュニャーナシュリーミトラの論式は一部分しか記載できなかった。拙稿「ジュニャーナシュリーミトラ〈瞬間的消滅〉論証」, 「思想的クロノロジーの逆転」(高知工業高等専門学校「学術紀要」第40号 1996. 1) 等を参照していただければ幸いである。]

〈キーワード〉 瞬間的消滅論, ラトナーカラジャンティ, ジュニャーナシュリーミトラ

(高知工業高等専門学校教授)